［博士論文審査要旨］

申請者：河尻　理恵子

論文題目　研究開発組織におけるネットワーク形成要因の考察：
組織の地理的統合に注目して

審査員　沼上　　幹
加藤　俊彦
佐々木将人

研究開発を有効かつ効率的に進めるためには，とくに開発に直接関与する技術者たちのコミュニケーション・ネットワークが重要だと考えられている．この点に注目して技術者が置かれた物理的な環境や組織内環境の影響を議論する研究が旧来から地道に行なわれてきている．本論文は，とくに，それまでは各地に散在していた研究所を 1 カ所に統合すること（コロケーション）がコミュニケーション・ネットワークに及ぼす影響に注目した実証研究の成果である．より具体的には，分散していた研究所を地理的に 1 カ所に集約した国内の大手化学メーカーを分析対象として，17 名のインタビューと 86 名の質問票調査を組み合わせて，コロケーションによってどれほど社内のネットワークが広がったのか，またそれによってどれほど開発時間が短縮されたのか，それらの変化に影響するデモグラフィックな要因や組織的な要因は何か，ということを丁寧に分析している．

本研究の実証結果として，多数の注目に値する知見が生み出されている．たとえば，まず第 1 に，コロケーション後に社内の相談相手の数が急速に増加した人ほど研究開発に必要な時間も急速に短くなっていること，また博士号所有者については知人数が急速に増加した人ほど，この短縮速度が速くなっていることが明らかになった．また第 2 に，実験装置の貸し借りが多い人ほどコミュニケーション・ネットワークの広がりが大きいことも見いだされた．既存研究でも「たまり場」の重要性が指摘されてきたが，研究所では特に共通の実験装置がその役割を担うことを指摘している点は重要な貢献である．実務家へのインプリケーションとしても，研究室専用の実験装置を投入するよりも，むしろある程度共有をさせた方が良いという可能性を示唆する点で，この知見は重要である．第 3 に，組織内のミーティングが知人数の増加の速さとは関係するものの相談相手の数の増加スピードとは関係しないことを明らかにしている点も本論文の貢献である．組織内ミーティングが知人数増加を促進し，博士号保有者については，それによって研究開発効率の向上が見られることも発見されている．つまり，物理的に近くにいるだけでなく，追加的な組織的施策（組織内ミーティングの開催）がコミュニケーション・ネットワーク形成には貢献するということである．

以上のように重要な知見を生み出している点は評価できるものの，若干の問題も残されている．たとえば，博士号取得者や研究者のタイプ（基礎・中間・応用）などによってコロケーションの成果との関係が変わってくる理由の解明に向けた実証作業がさらに必要である点など，今後の課題として残されている．しかし，このような問題は残されているものの，研究所のコロケーションが生み出す効果と，その効果を促進する要因を明確化した地道で丁寧な実証研究としての価値は損なわれるものではない．

よって、審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の筆者が一橋大学学位規則第５条第１項の規定に準じた取扱により一橋大学博士（商学）の学位を受けるに値するものと判断する。